

「小学校教育」

伊波

IHA Satoko

さと子

多くのことを学んだ2年間
今度は何かを還元したい

ボリビア第2の都市、サンタ・クルスから車で約2時間。日本語で「めんそーれオキナワへ」と書かれた看板をくぐった先に、青年海外協力隊員の伊波さと子さんが活動する町がある。そこは、1954年に当時の琉球政府の計画移民によって築かれた「オキナワ移住地」。北から南に第1、第2、第3移住地と分かれており、約900人の日系人と1万人を超えるボリビア人が暮らしている。町を歩けば、日本食を売っている商店や、日本語でも対応している診療所などがあり、至る所で琉球の風を感じることができる。

大学卒業後、地元沖縄県で臨時教員として働いていた伊波さん。地球の反対側にあるもう一つの「オキナ

JICA Volunteer Story

PROFILE

沖縄県うるま市出身。大学卒業後、沖縄県内の小学校で臨時教員として勤務。2010年から2年間、ボリビアにあるオキナワ移住地の学校で日本語教師を務める。12年に帰国後、小学校教諭に本採用となり、16年7月から青年海外協力隊(小学校教育)としてボリビアで活動中。



ボリビアにあるオキナワ第一日ボ学校の教壇に立つ伊波さん。「沖縄の古き良き時代を感じるこの町で、助け合うことの大切さを学びました」

「『沖縄』と『オキナワ』の架け橋になる」

南米のボリビアには、1950年代に沖縄県からの移住者たちが築いた町がある。地球の反対側にあるもう一つの「オキナワ」。ここで小学校教員として活動する青年海外協力隊員の伊波さと子さんは、子どもたちに日本語や日系社会の歴史について教えている。



ワの存在を知ったきっかけは、伊波さんの友人が仕事で実際にこのオキナワ移住地を訪れていたことだ。オキナワ移住地に住んでみたい——そう思った伊波さんは友人を通じて仕事を紹介してもらい、2010年から2年間、現地の「オキナワ第一日ボ学校」で日本語教師として働くことになった。「2年間働く中で多くのことを学び、自分の価値観や人生観にさまざまな変化がありました。帰国後は沖縄県の教員採用試験に合格し、小学校教員として働いていましたが、頭の片隅には『再びオキナワ移住地を訪れて何かを還元したい』という思いがずっとありました」と伊波さんは話す。

そんな中、伊波さんにとって絶好の機会が訪れる。2014年、沖縄県がJICAと結んだ自治体連携ボランティア派遣に向けた覚書によって、県内の教員が青年海外協力隊としてオキナワ移住地に派遣されることになったのだ。「就職3年目以上という応募資格を満たした年にすぐ受験し、今回の派遣が決まりました。実はその前の年に、まだ2年目なのに駄目元で応募したほど、オキナワ移住地でもう一度教壇に立つことは私の念願でした」

日本語や移住学習を通じて
自分たちのオキナワに関心を

伊波さんは現在、初等教育6年・中等教育3年の又エバ・エスペランサ校で週に4日活動している他、かつての職場だった思い出のオキナワ第一日ボ学校でも週に1日活動している。「近年、オキナワ移住地では子どもたちの日本語力と学習意欲の低下、さらには家庭や地域の日本語教育への関心の低さが課題となっており、子どもたちへの日本語の指導が、主に取り組んでいるのが、又エバ・エスペランサ校では、6〜9年生の担任として、週に7時間の授業を担当。日本語の指導はもちろん、子どもたちへの移住学習やキャリア教育、日系



a. 道徳の授業の一幕。つばを“自分自身”、つばに入った水を“努力”の積み重ねに例え、諦めないことの大切さを伝えた
b. 子どもたちが作成した移住すごろく。出題されるクイズも子ども自身で調べて考えた
c. 伊波さんの授業を受ける子どもたち。表現豊かな伊波さんの話にいつも引き込まれている
d. オキナワ移住地の入り口に建てられている看板

人としてのアイデンティティの形成も授業の柱に据えているという。「これまで、移住地の歴史を学び、当時の移住者の気持ちを考える学習を行いました。そのまとめとして作成したのが、仕事、学校、行事などのテーマごとにクイズに答えながらゴールを目指す『移住すごろく』です。クイズは、子どもたちが家族や先生にインタビューしながら情報収集を行って作りました。例えば仕事テーマなら、移住地で栽培されている農作物や収穫時期に関する情報を集めました」

一方、現地の教員に対しては、月に2回の校内研修を実施。伊波さんも講師となり、授業の進め方や子どもへの対応の仕方など、学級経営や授業実践につながる方法やノウハウを伝えている。また、教員同士で互いの授業を見学して意見交換を行う「授業研究」も行っている。

さらに、第一移住地の子どもが通うオキナワ第一日ボ学校と、第二、第三移住地の子どもが通う又エバ・エスペランサ校の交流を深めるための合同学習にも取り組んでいる。「両校から合わせて30人ほどの児童が集まり、移住の歴史や将来の働き方などについて学んでいます。初めは緊張していた子どもたちも次第に打ち解け、少しずつ仲良くなっています」と伊波さんはいふ。

日本のやり方を押し付けず、お互いの考えを尊重すること、そして、オキナワ移住地でしかできない活動を行うことを心掛けている伊波さん。運動会や豊年祭といった地域の行事に積極的に参加している他、沖縄の伝統文化の継承にも努めている。「派遣期間はもうすぐ終わりますが、私が帰国しても活動が途切れることなく続いていくためにはどうすればいいかを考えている段階です。これからも、大好きなオキナワ移住地と沖縄県のどちらにも貢献できるような活動を続けたいと思います」